慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	川田寿君と私 : 若き日の思い出
Sub Title	My memories of professor Hisashi Kawada in his youthful days
Author	伊東, 岱吉
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.10 (1971. 10) ,p.865(11)- 876(22)
JaLC DOI	10.14991/001.19711001-0011
Abstract	
Notes	川田寿教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19711001-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る学生諸君の多くは，経済学部あるいは商学部を卒業して就職するわけですが，この場合，この種の学問が，どのように諸君にとって意味づけられるかということです。私は1つのまだ十分に確定されてない学問の領域について，形成確立への困難な努力について話を続けたわけですが，諸君は今後ますます多様化して，複雑になっていく社会にでていった場合に，単一の視点にたった学問だけでは，社会の変化に対して洞察力ももちえないことになりましょう。身につけた学問を中心として，関連分野に対する理解を進めていくことが必要です。そして非常に変化の激しい社会にあって，いいことだと思っていたら悪い結果がでてくるというような変転きわまりない事態に直面すると思います。この場合に，いまいったようなインターディシプリナリなアプローチが諸君の人生のコースを決定するためになんらか応用できるだろうということが1つであります。

最後にさきほど中鉢教授のご紹介にあった産業研究所でありますが，産業研究所は産業労働問題，あるいは私がお話ししたような労使関係の多部門研究，あるいは総合研究を発展させて行こうという目的で設立されました。設立者は塾ですが，これにいちばん大きな力を尽くされた藤林敬三教授は，上の目的の達成を非常に強く望んでおられました。藤林先生は亡くなられましたけれども，現在，産業研究所は残っております。私も塾を去りますけれども，この産業研究所というものが，単に労使関係に局限されない，日本の実証的な社会研究，社会科学研究のセンターとして発展することを望んでいます。研究所は現在まで地味ではありますが，多くの成果を上げてきています。国際交流の場として，部門研究の多くの成果を上げています。特に経済学の視点からすれば，労働市場の研究には特に優れたものがあります。たとえば，総合的立場からの賃金決定機構に対する佐野陽子さんたちの研究は非常に高く評価されております。もちろん，わが国において非常に新しい試みでありますだけに，いろんな問題はあると思いますが，これをあえて押し切って，ある種の研究をどんどん進めているのを心強く思っています。

このほか，労働法学の立場からも，産業社会学の立場からも，あるいは，社会心理学の立場からも多くの研究が，研究所の場で進められています。最近では，経済学，社会学の立場から，企業レベルの国際比較研究が進められています。受託調査のようなことだけにあまり熱中しないで，いままでの実績をさらに大きくしていくことを期待しています。

以上は労使関係の多部門間研究，比較研究とある程度関連する身辺のことですが，最終講義の結びとして諸君の記憶にとどめて貰いたいのであります。

諸君は塾の経済学部，あるいは商学部の卒業生として間もなく社会で活動されることになりますが，塾の繁栄のために，キャンパスのいろいろな事情に対して，物心両面からの協力と援助を提供されるよう，キャンパスを去る一人として，私からも諸君に訴えたいのであります。

（経済学部前教授）

川田寿君と私

——若き日の思い出——

伊東岱吉

I

私が川田君をはじめて識ったのは，三田山上の新館（今の新研究室のあるところ）の図書館よりの一番奥の教室であった。それは慶応義塾大学社会科学研究会（「社研」）の席上であった。われわれは机をコの字型に並べ，その中央に先生の椅子がおかれていた。昭和3年の新学期の頃と思うが，いつも出てくる金原賢之助先生に代って，背のひくい労働者を思わせる肩幅のひろい藤林敬三先生（当時助手）がその椅子につかれ，つづいて，銘仙の着物に袴を着け眼射しの鋭い大きな身体の異様な風貌の人がその隣りに坐った。私は社研というものを未だ余り知らなかったので，川田君がどこか他所から来た先生だと思った。貫録という言葉があるが川田先生は藤林先生よりはるかに貫録があった。その日のテキストはマルクスの「賃労働と資本」であった。リポートと質疑討論が進む。学生のわからないところは先生に質問する。藤林先生の答えは真面目ではあったが余り説得的でなく，何回も質疑がくりかえされる。学生が，「では川田さん願います」というと，この田舎書生風の人は立て板に水を流すような調子で，実に明快に答えてくれるのであった。私は川田君が，学生運動のために予科時代2年もおくれ，私たちと同学年の本科1年の学生であるとは夢にも思わなかった。

私はえらい先生があるものだと思った。それまで大学の講義に興味もわかず，先生にも殆んど信頼感を失っていた私は，川田君が豊富な事例と明快な理論的分析，しかもマルクスに関する詳細な考証（藤林先生にはこの点であきたらなかった）の上での説明を聞くと，はじめて納得が行き，感激が湧いてきた。約2時間の「社研」の研究会の時間が私にとっては，生まれてはじめてのように思われる充実した深さをもった時間であった。

その頃私は，これから成長し，はいって行く日本の社会，さらには資本主義社会について，深い疑問をもっていた。この疑問は，深川の製材工場主の子として生まれ，職工の子供と交わり，世の中の差別というものに小学生時代から問題を感じ，「忠君愛国」主義の父に質問すると，日頃は「正

直」を第一義とし，「勤勉力行」を文字通り実行してきた尊敬する父が，世の中の話となると，どうも私の納得の行かぬ返事しかせず，問いつめると「商売はまた別だ，理屈通りにはいかない」と答えられることで，どうにも解決できぬものがあった。普通部に入ってから兄の影響もあり，やたらに西欧の文学や小説を，わからずながら読むようになり，関東大震災（大正12年，1923年）のとき私は普通部（中学）3年生であったが，朝鮮人虐殺事件，亀戸事件，大杉栄夫妻事件（甘粕大尉事件）などを見聞するに及んで，私には「社会の虚偽とは何か」という問題を考えつめるようなくせができてしまった。今は戦災で焼失したが，当時，「作文日記」のような原稿用紙風の日記帳が発売されており，私はこれを買って，いろいろ考えたことを書き，予科時代にはこれが十数冊にもなったものである。普通部の4年のとき，日頃考えてきたことを普通部弁論大会で発表してメダルをもらった思い出もある。「社会の虚偽とは何か」の疑問はやがて，予科時代に，ドストエフスキーからトルストイ，そしてロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」に至って，光明を見出した思いがした。だが，科学的裏づけ，何かしっかりした学問的体系はないものか，と思っているところに，マルクスが現われた。マルクスは予科3年当時，小泉信三先生の講義を盗聴することによって触発されたものであった。その夏，高畠素之訳の「資本論」をリュックサックにつめて十和田湖近くの蔦温泉に普通部以来の親友，茨城県古河の船江豊三郎君（当時顕己君）と1ヵ月にわたって泊り込み，わからずながらも猛烈に勉強してみたものであった。小説などでヒントを得たことが，どうもマルクスには，社会科学として展開されているらしい，むずかしいがこれを自分のものにしなければならない，というのが当時の心境であった。

その頃であったか，これも普通部以来の同級友人であるが，伊東祐政君が自宅に来いと誘う。同君の家は西大久保にあって，父は佐賀藩出身の軍人で，田中義一将軍と大陸政策で対立して退役した人ということであった。かれは質素な家風が私と似て，普通部4年の頃，ぜいたくになった級友が，30銭の弁当や15銭のサンドウイッチを予約し，それが教室の廊下の窓のわきにつけられた置き場に積まれる，といった情景の中で，家からアルミの弁当を持参するという点で私と同類であった。普通部4年の国語の教師を担当された横山重先生が，「天の岩戸」は伝説だ，歴代天皇の歌の中にも良いものと悪いものがある，などと，真実を語ることが，当時の少年にはわからず，国体教育の固定観念を植えつけられた大部分の者が，これに反撥して，普通部では珍しい教師排斥運動に発展したとき，ただ1人，クロポトキンの話を持ち出してクラスの決議に反対したのも伊東祐政君であった。

その祐政君は僕に目をつけ自宅に誘って，当時のマルクス主義の文献を貸してくれる。私はマルクシズムについての小泉先生流の反論をする。祐政君は援軍をたのんで，普通部1年先輩の山口弥三郎君宅へ僕をつれて行く。たしか予科3年の冬の日であったと思うが，私は山口君の家の2階の，硝子戸に冬の日射しの入る静かな日の午後，山口君のおちついた，じゅんじゅんと説く議論にだんだん引き込まれて行くのであった。祐政君も山口君も慶大社研の有力メンバーであった。

こうして私は，当時全国的に国家の弾圧下にあった「社研」に入会することとなった。昭和3年の春，本科1年になったばかりの頃であったと思う。

（註）当時の大学は予科3年，本科3年の6年制で，普通部（中学）は5年制であったが，4年から大学に進学することが許されており，大部分の普通部生は4年から予科1年に進んだ。したがって昭和3年4月私が本科1年になったときは満19歳であった。

あとになってわかったことであるが，私が入会した当時の慶大社研は，例の昭和3年3月15日の日本共産党員大検挙（3・15事件）の余波で，その中心人物のうちの実践運動に関係していた人々の大部分が検挙されてしまったところであった。そして全国的に社研は当局の方針でその禁止が一斉に進められていた。義塾においても当局から解散の申入れがあったが，当時の林塾長は文部大臣に対して，「自由こそ急進学生を無力な少数派に局限できる手段である」という考え方から義塾の伝統の自由の方針を一貫すると述べ，全国で異例の社研の存続となった（川田寿「思い出に残る三田の人々」三田評論，'71年6月号）。

存続とはなったが，それまで会長であった加田哲二教授が会長を辞められ，面倒な社研を引き受けてくれる先生がない。会長がなければ自然消滅となる。小泉信三先生は，学内における学問研究は自由であるが，革命を志向する実践運動は学籍を離れて行なうべきものだ，この原則を承認すれば会長を推薦するということで，ようやく金原賢之助助教授が会長となった。

私がはじめて社研に出席したときは金原先生はコの字型に並べた学生席の一端に坐り，学生の労働価値説に関する討論には無関心の風で何かメモを書いており，たまたま隣に坐った私が，何を書いているのかとみると，画らしきもののいたずら書きをしていた。そして学生の議論がモタついてきた頃，やはりこれを聞いていたものとみえて，「海底に沈んだ金の価値はどうなるのですか」と突然発言してニヤリと笑うという風であった。

はじめに述べた川田君との出会いは，こういう社研の例会が何回かつづいたのちのことで，当時最も社研や思想学生に温い思いやりのあった三辺金蔵先生の弟子の藤林先生が金原先生の代りに出席した日のことであったのである。

例会がおわって教室を出るとき，その日はじめて出席していた痩せて背の高い文士のような風貌をした年上の学生に紹介された。川田君とは一見正反対の神経質そうな白皙の面長の美男子で，「僕も大森だから一緒に帰ろう」ということになった。中村清助君であった。国電の大森駅を下りて，池上に通ずる賑やかな道を相当あるいて馬込村（当時は村であった）の谷中に入る道（現在は環状7号線が通って昔の面影は全くない）を右に折れると，谷中から流れてくる小川の橋にかかる。橋のたもとに「出家とその弟子」で知られた倉田百三の小ぎれいな家がある。そのちょっと先きの小さな借家が並ぶ間を右へ少し入ったところに中村君の下宿があった。「ちょっと寄っていかないか」と誘われるままに玄関わきのかれの四畳半に上り込む。日はもう暮れてしまって，いかにもわびしい夕べであった。そこへ下宿のおばさんがお茶をもってきてくれる。玄関には学生らしい人々のはきも

のが乱雑に散らかっている。だんだんわかったことだが，中村君たち何人かでこの家を借りており，慶応の学生だけでなく東大（帝大）生もおり，さっきのおばさんは共同で雇っているとのことであった。社研の議論のつづきを中村君とすると，中村君は実によくできる。一見近づきにくいようだったが，こうして話してみると博識で，しかも知ったかぶりをせず，かけだしの自分が恥ずかしくなるような奥行きのある人で，笑い方が淋しげで温い。すっかり親しくなって家に帰った。私の家はそれからしばらく行ったところの丘の上にあった。

当時の社研のメンバーが何名であったか正確にはわからないが，今でも懐しくその名を思い出せる人は15名に及ぶ。その中の一部は実践運動に参加せず，過半数は何等かの形で関係していたと思われる。それも共産青年同盟に加入しているもの，「無産者新聞」の配布を専ら担当しているもの，学生社会科学連合（「学連」）の運動をしているもの，東京市電の労働組合など労働組合運動に参加しているものなど，いろいろであり，戦術的にも弾圧がきびしいので，一種の分業も行なわれていたらしい。治安維持法下の警察の取締りは戦後の今日では想像もつかぬほどきびしいものであったから，学生の運動家の警戒心と対応策もきびしいもので，社研で勉強だけしていた私達にはその組織などはほとんどわからなかった。

あとでわかったことであるが，川田君は「学連」の指導者，組織者（オルグ）であった。大正14年1月全国の社研連合会の集会が京都大学で開かれ，労働者教育などの方針が討議されたときくが，野呂栄太郎氏はじめその中心指導者が検挙され，初の治安維持法の発動で各大学の「ケルン」（中核人物）38名が起訴されるという事件（京大学生事件，「学連事件」）があった。川田君はこの弾圧で潰滅に瀕した全国組織を再建するために，京大の宇都宮徳馬氏や東大の斎藤，堅山などの諸氏とともに活動していたときいている。

川田君は用心してか，中村君たちの「アジト」には同居せず，馬込村の谷中の下宿に1人でいたとのことであるが，私には，その後ずいぶん親しくなってからも，かれの住所はわからなかった。突然現われ突然消えるという風であった。

私たち普通部からきた仲間は大森の友人宅（父が会社社長で大邸宅であった）にしばしば集まり，テニスをしたり，ボクシングをしたり，ときには大森海岸に遠征して飲んだりして，頗る愉快な集りを作っていた。これをいつともなく「大森クラブ」と呼ぶようになったが，川田君もしばしばここに現われ，むずかしい話は少しもしないで皆と一緒に遊んだ。はじめは左翼の大物ということで気味悪がっていた仲間も，いつしかかれの田夫子然たる飾らぬ明るい人間性にひかれて警戒心を解き，クラブのメンバーに数えるようになった。大森クラブの仲間にも社会運動や社会主義への関心はある。親しくなると逆に川田君にこのような問題について質問をはじめる。川田君は実によく問題を消化しているので，その話にひとりでに皆はひき込まれてしまう。どこでいつ勉強するのか，当時のソ連やドイツの運動についても，まるで自分が見てきたように生き生きと話す。ベルリンのローテ・ファーネの話など余りに皆を感激させたので，「川田の赤色講談」といってあとあとまでも語りつがれるといった具合であった。

本科2年（昭和5年の1月頃）の学年末試験が近づいた頃であった。川田君は日頃大学に出席していないので「伊東君，君のノートを貸してくれないか」という。「よろしい」ということで貸すと，かれはこれを写すのではなく，電車の中やその他の暇をみては読んで覚えるだけであった。つぎつぎに貸すと実に几帳面に約束の時と所でかえしてくれる。いつも大変忙しそうに，つぎのノートを渡すと，「では失敬」といって去って行く。街路上で渡したこともあれば，私の家の裏口で渡したこともある。ある夜，「チャップマンの経済原論（アルフレッド・マーシャルの弟子で当時英文の原書を教科書に使用していた）を中村君の家で皆に講義してくれないか」，というので，行くと数名の社研の仲間もきており，「皆ほとんど読んでいないから，要点を一晩でうまく説明しろ」という。2，3時間もかかったか，基本点だけをまとめて話すと皆がノートをとる。隣りの部屋では名も知らぬ数名の東大生が，黙々と宣伝ビラのガリ版を刷っている。小さい火鉢だけで，夜が更けると寒さがしんしんとひざから腰にしみ込んでくる。

あとでわかったことであるが，この学年末試験の成績表を教務でもらって，アメリカの川田君に送るとき，これをみて驚いた。私からノートを借りて忙しい運動の合間に読んだだけで試験を受けた川田君の成績がほとんどAであったのである。私はのちにレーニンの伝記を読んで，かれの優れた著作の相当部分が革命運動で東奔西走する列車の中やかくれ家で書かれたということを知り，川田君のことを想い出した。

その頃の学年末試験はたしか3月初め頃行なわれたように思うが，試験が半ば以上進んだある日のことである。金原賢之助先生の金融論の試験が現在の第1号館の敷地にあった木造建て校舎の2階で行なわれていた。試験がはじまってしばらくすると金原先生が入ってきて出席簿を読み上げる。読みおわって，「だれか呼ばれなかった人はいませんか」と先生がいうと，呑気な普通部の仲間（今は社長さん）が立って先生のところに行き，「私は呼ばれませんでした」という。「君は履修届を出さなかったんではないですか」と先生にきかれると，かれは胸をはって「金原先生に出しました」と答えたので満場大笑いになった。一度も出席していなかったので，金原先生の顔を知らなかったのである。

川田君は僕の前に坐っていた。その川田君がいつもと違って妙にソワソワしながら，廊下の硝子窓の方をみる。たしかに廊下には複数の背広をきた人の姿がみえる。当時「差入れ」と称する巧妙なカンニングが流行して，教務課員の試験監督が黒板に問題を書いている間とか，答案用紙を配っている間とかに，うまく余分の答案用紙をとり，問題を書いて，廊下にいる仲間に窓から渡す。その共犯者は三田通りの喫茶店あたりで答案を作成し，鐘が鳴って学生が一斉に立って教壇に殺到する混雑にまぎれて教室に入り，答案を提出する，という方式であった。教務がこれに気づいて，答

案に特殊なゴム印を押すと，このゴム印を三田の判屋にたのんで即席に作らせたりしてその裏をかくといった具合で，学校当局はホトホト手を焼いていた。私は迂闊にも廊下の人影は「差入れ」の学生かあるいはこれを防ごうとする教務課員かと思って気にも止めなかった。

鐘が鳴ってドヤドヤと学生が立ち上り教室を出てみると，いつもニコニコ笑って，「今日の試験はどうだった」と話しかける川田君の姿が見えない。おかしいなと思って友人に聞いても，だれも川田君をみたものはいない。私の胸に不吉な予感がひろがった。帰り道用心しながら中村君たちの家へはいる道をのぞくと，あれが刑事だったか，と思われる風体の男が1人，2人，何気ない風で立っている。とうとうやってきたな，と思って帰ったが，川田君はどうしたのだろうか，ということが気になって心が騒ぐ。

数日あとのことである。私は風呂が好きで毎日はいりたい。ところがわが家は倹約のため毎日は風呂を焚かない。そういう日は谷中の銭湯に行く。午後3時頃空いている風呂にひとりでつかっている気持は何ともいえない。ところがその日は近くの植木屋か鳶職人か2人の男が入ってきて声高に話している。聞くともなく聞いていると，1人が得意になって，共産党の捕物をみた話をしている。何でも私の家に来る坂の下の新しい家ができたところで，逃げた男は追いつめられて他所の家の庭を走り，かき根をこえてつぎの家の庭にはいったところを捕ったんだが，かけつけてみると大きな男が小さい男の上に馬乗りになっている。どちらが刑事かわからない。下の小さい男が上の奴が犯人だというと，上の大きい男は下の奴を犯人だという。人相からみると上の方が良い。どちらが犯人かわからなくて困った，というのである。人相のよい方が川田君だったのである。

II

この検挙で慶大社研も事実上潰滅した。実践運動に入らなかったメンバーが残っているから再開しようという話もあり，その試みもなされたが，アクティブ・メンバーを失った社研は火が消えたようで永続きはしなかった。これより先き，川田君の政治的判断による示唆もあり，私たち普通部出身者を中心に「慶應義塾大学金融研究会」というものが昭和4年の初夏に発足していた。この会は面白いことに，全く自然発生的に成立したものであった。大森クラブとは別の，伊東祐政君たちのグループが三田通りからちょっとはいった裏通りの洋服屋の2階を1室借りて，かれらの溜り場にしていた。

その頃の日本の社会経済情勢を思い起すと，昭和2年には金融恐慌があり，昭和5年1月11日には「金解禁」（金本位制復帰）が行なわれ，前年の10月ニューヨークのウォール街の株式大暴落からはじまった世界大恐慌が日本にも波及し，時機を誤った日本の金本位制復帰，しかも平価を切下げて行なえという批判を押えて旧平価で金解禁を行なったデフレ効果も加わって，恐慌の惨状は目に余

るものがあった。とくに東北農村の疲弊はひどく，借金のかたに娘が売られる例は枚挙にいとまがない，という有様であった。3月には株式の大暴落があり，失業者は巷に満ち，慶大卒業生も過半数が就職できず，保険の外交員や親類縁者の中小企業に行くという始末であった。

話は少し前後するが，伊東祐政君の発案で，かれらのグループも，昭和2年の金融恐慌以来の日本経済の深刻な実情を目のあたりにみて，時局経済の勉強をしようということになった。私もこれに参加した。大学の講義でこのような問題に生き生きと答えてくれる先生はほとんどなかった。そこで新聞の経済面ぐらいはよくわかるようになろうということで，はじめは昼休み，洋服屋の2階の部屋で弁当を一緒に食べ「経済記事の基礎知識」的な解説物の共同勉強をはじめた。はじめは5，6人であったが，伝え聞いて集まるものが次第にふえ，解説物だけではあきたらない，もっとしっかりしたものを読もうということになり，レーニンの「帝国主義論」の読書会となり，時間も相当かけるようになり，これを終るとヒルファーディングの金融資本論がよいが，これはむずかしすぎるから，猪股津南雄「金融資本論」(改造文庫)を読もう，ということになった。その頃には大森クラブの仲間も合流し，集まるものは益々ふえて借りた洋服屋の2階の部屋にはいりきれなくなった。そこで，ひとつ教室を借りようということになり，学校に交渉すると，「塾の先生が会長となった会でなければ貸せない」という。それでは思いきって会を作ろうということになって，会の名を「金融研究会」と決め，向井鹿松先生に会長をお願いに行くと，先生は大層乗り気で早速引き受けてくれた。宣伝のうまいもの，金集めの得意なものもあって，「金融研究会」発会式を60～70人入れる教室でやったところ満員の盛況となり，私たちが発起人として役員になったが，例会にも熱心に出てきて議論をする見知らぬ学生も少なくないので，漸次かれらにも役をふりわけ，学年も上と下へとひろがって行った。当時第一銀行の頭取で学問ずきの明石照夫氏，日銀の柳沼調査局長，その他も頼むとよろこんで来て話をしてくれる。かかる財界の名士を呼んできて信頼される妙な手腕をもった仲間もいて益々盛んになった。翌年には三田の大教室を借りて「世界恐慌」の展示会（今日の三田祭のゼミ発表のようなもの）をやったところ大評判で，塾の先生のみならず東大の大内兵衛先生やその他有名な方々も観にきてくれ，激励され，千倉書房の社長が来て自分のところで出版してはどうかという話まで出た。寄附をとったり，財界名士の信頼を得たりすることの妙手をもった仲間というのは吉田寛君（普通部以来の同窓で最近までの日大経済学部長）で，かれは万事積極的で，丸善から広告をとり，当時の千代田生命本社（京橋）の1階の広間を借り，ここで再び展覧会を開くという派手なことまでやった。その縁で丸善から「恐慌と世界経済」(昭和7年）という大部のクロース張りの立派な本を学生会員の手で出すことになった。ところが朝日新聞がこの本のブック・レビューを相当大きく紙面をさいてやってくれた上に，学生の会を間違えて慶応大学経済学部の若手教授連の力作などと褒めてくれたものであった。

金融研究会の傾向にあきたらぬ左よりの学生たちが私たちが卒業した年（昭和6年）に日本資本

主義の研究をするために作ったのが「慶應義塾大学日本経済事情研究会」であり，ここの学生たちは，昭和8年には改造社の経済学全集の第63巻「日本戦時経済論」を刊行した(註)。私は両方の研究会に関係しており，何れの出版にも執筆をした。商学部教授の小竹豊治君，森五郎君，高等部で戦時まで教職にあった船江豊三郎君，経済学部で先年まで世界経済論の講義を担当していた外務省の河合俊三君，ＮＨＫでおなじみの福良俊之君たち，学問や研究，ジャーナリズムで活躍するようになった人々は，当時の何れかの研究会の仲間であり，小池基之経済学部教授も私とともに日本経済事情研究会のテューターのような役をしていた。

(註) 当時改造社の経済学全集は相当権威あるものとされ，1冊1円の「円本」ではあったが，この「日本経済論」は1万部も売れて研究会には印税が1千円（当時としては小さい家が建つ貨幣価値）も入った。われわれは研究会員のみならず「金研」の仲間も呼び，関係の諸先生方も招いて銀座の牛鍋屋（「松喜」）で盛大な出版祝賀会を開いた。その費用は僅か100円余りであった。

日本経済事情研究会は伊藤秀一教授を会長として創立された。同教授は塾の経済学部では当時珍らしいマルクス経済学の本格的研究者であったが，昭和9年若くして亡くなられ，つぎの会長は藤林敬三教授，同教授も間もなく一兵卒として応召，中支に出征され，最後の会長は後年ＮＨＫ会長として活躍された永田清教授であった。三教授ともいまは故人となられてしまった。この会も当初は研究中心の集まりであったが後継者の学生の中に前の「社研」と同じような実践運動を行なうものが現われ，いわば社研の再版のようになった。昭和13年11月戦争はいよいよ拡大し，思想取締りもいよいよきびしくなった頃，「京浜共産党再建運動」の関係とかの嫌疑で会員中の相当数が検挙され，当時の小泉信三塾長は文部大臣から塾の左翼分子処分を迫られて苦慮された。学生の中で，最も中心的であった松沢元典君はついに拘留中に死亡するという，犠牲者まで出すに至った。

話は前に戻るが，社研の検挙があって，相当経ってから，大森駅から池上に通ずる道の，とある小さな古本屋にマルクス，エンゲルス，レーニンの著作，それも翻訳のみでなくドイツ語の原本，さらには当時入手し難い各種の左翼文献，パンフレット類が，書棚にズラリと並んでいた。時々はいる店で，こんなにまとまって左翼文献が一斉に並べられたのをはじめてみた私は，オヤッと思ってその2，3冊を手にとって見ると，何と H. Kawada とサインがしてあり，その他中村君の下宿で見せられた懐しいものばかりである。中村君の下宿では問題になりそうな本は箱に入れて，あげぶたの下などにかくしてあった。警察の手入れのときに家宅捜索が徹底的に行なわれ，証拠書類として洗いざらい持去られたということは聞いていたが，それらが本人に戻されず，刑事たちの小遣いかせぎに古本屋に売られていたのである。私は早速家に帰って父にたのみ幾許かの金を手にして，H. Kawada の署名のある原書をはじめ，友人たちが苦労して買い集めたであろう本の主なものを買い求めて帰った。多くの友人たちは釈放されていたが，川田君だけは未だ釈放されていなかった。私は川田君の懐しい署名入りの原書をひもときながら，かれの安否を思った。

そのうち初夏の日射しがまぶしい季節になった。「川田君が釈放されて郷里の家に帰された。ひどい拷問をうけてすっかりやつれている上に脚気になって身体がむくんで療養中だ」というニュースが仲間から伝えられた。われわれは本科3年Ａ組の同じクラスで，クラス委員の選挙では川田，

伊東祐政と私と3人が選ばれていた。授業の合間にクラスの者に川田君の事情を説明し，「かれを郷里に見舞いたい。脚気で苦しんでいるから見舞いに夏ミカンをもって行きたい」とカンパをたのんだ。当時すでにクラスの中には蓑田胸喜氏らの右翼運動「原理日本」に共鳴してそれに参加している学生もあり，その1人が反対論を述べたが，私と祐政君とが学生帽をもってまわると大部分の学生がカンパの金を入れてくれた。

それは青葉が目にしみるカラリと晴れた日であった。祐政君と私は常磐線の荒川沖駅で汽車を降りた。土浦の手前の小さな田舎の駅で，降りたのはわれわれ2人だけだった。駅にまた刑事らしい人物を見かけた。しかしこれはわれわれの思い過しだったらしい。ガタガタのバスに乗る。いくつかの部落をすぎて朝日村実穀でおりる。川田君の屋敷は年輪を経た巨木にかこまれた，一きわ目立つ門構えの家で，すぐそれと知れた。鶏が僕等が庭に入ると逃げ散る。ドッシリした構えの家の土間に入って声をかけると妹さんらしい人が出てきて，茨城弁で家の者を呼ぶ。川田君によく似た，人の好さそうな顔をした大きな身体のお母さんが出てくる。案内されて書院に通る。そこへ川田君が「ヤアー，よくきたね」といいながら出て来た。覚悟はしていたが，一目見てアッと驚いた。川田君の顔はブクブクふくれて形が崩れている。しかも歩行が自由でなく，柱につかまりながらヨタヨタしている。話では当時の拷問の数々と残虐さは聞いていたが，この川田君の変り果てた姿を見て私は慄然とした。

川田君は未だ仮釈放であった。親戚の風見章氏（茨城県選出代議士で近衛内閣の官房長官，閣僚を歴任，戦後社会党に属して親中国派であった）の奔走によって仮釈放となったとのことである。「今でも刑事がチョクチョク見廻りにくるので，ここではどうも話が思うようにできない，外へ出よう」と川田君が言うので3人は裏門から田圃に出た。川田君は松葉杖を使ってゆっくり歩く。田圃をすぎて向う側の雑木林の丘の中腹に腰をおろす。「インテリの弱さをこんなに痛感したことはない」と静かにいくたびも川田君がわれわれに言ったことが最も印象的であった。

初夏の日射しがいつの間にか雲にさえぎられて，疎林を通して見渡せる水田には農民が幾組か田植えをしている。水墨画を見るような風景であったが，それがいかにも暗い感じで，今もマザマザと思い出される。検挙，拷問，仲間の自白，等々から話は川田君が日頃調べてよく知る茨城の百姓の苦しい労働と生活の話に移り，当時の暗い日本の姿が，眼前の風景を裏づけて，暗い印象が残っているのかと思う。

それからしばらくして川田君は渡米することとなった。風見氏の奔走で，アメリカに行くなら起訴はしないということになったときいた。大森クラブの連中は川田君の送別をしたいと言いだし，カンパも集まり，7月のある日，大森の料亭で送別会が行なわれた。川田君は，予科時代寄宿（柯南寮）していたことのある三田の聖坂上のフレンド教会（クェーカー）の親しい牧師の紹介で，先ずカンサス・シティに行き，そこの私人宅で皿洗い等の仕事をしながら，フレンド大学で学ぶという

ことであった。私は大森クラブの仲間に，「川田君はわれわれ世代の太陽のような存在だった。かれはアメリカでの苦学にもくじけないであろう。やがてはまた日本にかえってきて貧しい人々のために活動するに違いない」とあいさつした。私の脳裡にはレーニンや片山潜のことが，あいさつしながら浮かんでいた。昭和5年7月の末，大森クラブの仲間やその他の人々が手をふるのをあとにして，横浜から貨物船で川田君はアメリカに発った。

Ⅲ

川田君は土浦中学の出身であるが，中学の高学年の頃から社会問題，思想問題に関心をもっていたらしい。令兄は京都大学の西田哲学の門下で三木清と同門であり同じ思想傾向の持主である。令兄の影響もあったと思うが，慶大予科に進んだ当初は，前に述べたフレンド教会柯南寮にいて社研にも入らず，予科の講義にもあきたらず，ひとりいろいろ本を読んでいたということである。川田君が社研に入り，その方面の運動に熱中しはじめたのは大正15年，予科3年の頃からであり，とくに大正14年の京都大学学連事件の影響が大きく，さらに先輩野呂栄太郎の思想・人間双方にわたる影響を大きく受けたとのことである。定年後に川田君が書いた「思い出に残る三田の人々」(「三田評論」1971年6月号) によると，柯南寮にいた頃，塾の諸先輩に影響されて，予科生でありながら高橋誠一郎先生や小泉信三，阿部秀一先生等の本科の講義を盗聴し，はじめは，「キリスト教に流れる社会思想を中心として，幼稚ながら一種の空想社会主義を構想したりもした」と書いている。ついで「小泉先生の社会問題の盗聴をはじめ，そこで河上肇博士の論説に興味をもつようになった。先生と河上博士を比較し，『社会問題研究』や『我等』などのバックナンバーを集めて読むうちに，いつの間にか小泉先生に反論された人達の説に同調するようになっていた。」そして野呂栄太郎さんは「塾生時代最も尊敬した三田の人であった」として野呂氏のことを書いている。私も病床にある野呂氏の研究に協力した橋本勝彦さん（塾の高等部大正15年第1回卒業生で，当初は義塾図書館員，ついで高等部の先生となったが，終戦直前若くして病没された）とは，私が高等部の最初の助手となった頃から兄弟のような親しい間柄となったが，橋本氏を通じて野呂さんのこと，私が知る以前の三田の社会思想や運動のことを具体的に教わったものである。私は当時，「理論では野呂，実践では川田」とこの2人をその頃の三田の先達と思っていた。

渡米後川田君は1年足らずでフレンド大学を卒業し，当時の便りによれば，ガタガタの中古自動車を運転してカンサスからフィラデルフィヤに行き，ペンシルバニア大学の大学院，ワールトン・スクールに入学，シュルター教授について，1年間（昭和7年6月）でMAの学位をとっている。その修士論文は「日本の銀行集中」というテーマで，これを書くための資料として，私は三田の清水という古本屋の親しくしていたおやじさんにたのんで「明治財政史」（全8巻）を川田君に送ってもらったことを思い出す。

ペンシルバニア大学を出てからの川田君は，昭和15年12月帰国するまでレストランその他でのアルバイトをつづけながら，当時のルーズヴェルト政権のニュー・ディールにおける労使関係，労働経済，労働組合運動を研究していたということである。いかにも川田君らしく，アルバイトをしていたニューヨークの「国際ホテル・レストラン・コック従業員組合」の非専従組合長に選ばれて労働組合で活動したりしている。

ここに面白いエピソードがある。昭和10年秋，私が結婚したばかりの頃と思うが，岡崎市の織物問屋の社長，鶴田督亮という方から滞米中の川田君のことで折入って御相談したいという便りがあった。何のことかと不審に思いながら先方指定の銀座の料亭に行くと，私の父と同年配の，ガッシリした立派な風貌のおやじさんが待っておられる。「実は娘の定子と川田君との結婚がニューヨークで既に行なわれたのだが，田舎町のことでだれか正式の仲人を立てて披露をしなければならぬ。ついてはあなた御夫妻にお願いできまいか」ということである。私は当時26歳，結婚したてのホヤホヤで媒酌人とは驚きいった次第であったが，何よりはじめて聞くおめでたいニュースで敬愛する川田君のためであり，それに形式的に披露文に名前を出すだけのことであるから，早速私も承諾した。こうして私たち夫婦は川田夫妻の仲人となり，しかもこれが仲人役第1号となったのである。川田夫人定子さんはYWCAの関係でアメリカに留学中，川田君と親しくなり結ばれることになったのだが，帰国後私たち家族と親戚のように親しくなり，私の息子2人はしばしば終戦直後の荒川沖の川田家に厄介になり，長男の結婚の仲人を川田夫妻にお願いするということにまでなった。

昭和16年1月23日，足かけ12年振りで川田夫妻は帰国した。私たちは胸をわくわくさせて新橋の第一ホテルのロビーで久しぶりの再会をした。川田君の顔には渡米中の苦労のしわが刻まれていたが，顔色は健康な赤銅色に光り，ガッシリした身体，ゴマ塩色になった髪，「どうみてもこれはアンクル・トムだね」と笑ったものである。

川田君は世界経済調査会の資料課に勤めることになり，尾山台駅（今日の田園都市線）の近くに新居を見つけ，当時洗足駅の近くに住む私たち家族ともしばしば行き来して平和な生活を営んでいた。

昭和17年9月中旬の日曜日のことである。私たち夫婦は未だヨチヨチ歩きの長男をつれ，尾山台の畑の中にポツンと2軒並んで新築された貸家の1つ，川田君の家を訪ねた。かねて約束していたのに玄関がしまっており，庭をまわって見ても人影がない。どうしたことか，と思っていると隣りの奥さんが出てきて，「刑事さんが何人もきて，お二人とも連れて行かれましたよ。あんな良い方たちがどうしたことなんでしょうね」という。私たちにも検挙の理由は皆目わからなかった。全くひどいもので，あとでわかったことであるが，後世，「横浜事件」（「泊事件」ともいう）と呼ばれたもので，当時の内務省はわが国の時局を批判する言論出版関係の広汎な弾圧方針をきめ，富山県の泊（とまり）の旅館で行なわれた細川嘉六氏の著書の出版記念会に出席した人々をはじめ，その周辺

の人々（「中央公論」，「改造」等の編集関係の人々はじめ広汎に及ぶ）をいもづる式に検挙した。そしてその前から検挙がはじまっていた満鉄関係や大陸帰還者との関係をデッチ上げようとしたのであった。川田夫妻は，アメリカからの帰還者が，川田君がニューヨークで労働組合運動をしていたことをしゃべったことがきっかけとなり，泊事件との関係がありはしないかとの仮説によって検挙されたのだそうである。この無実のデッチ上げにもとづく検挙事件と川田夫妻のひどい拷問のことは石川達三の「風にそよぐ葦」に相当詳しく扱われている。こうして川田君は終戦の年の春，奥さんは同じ年の終戦直前まで，３年近くにわたって捕われの身となっていたのである。

昭和20年３月10日東京下町は大空襲に襲われ，深川の製材所を経営していた私の長兄夫妻と私たちが可愛がっていた２人の姪は焼死し，家族を疎開していた次兄だけが火傷を負って私の家にころがり込んできた。その数日あとの夕方のことである。捕われたままで消息不明になっていた川田君が奥さんの弟の金弥さんにつきそわれて突然私の家に現われた。「今釈放されたばかりなんだよ」という川田君の顔は痩せてヒゲぼうぼう，粗末な衣類を着てしょんぼり玄関に立っている。阿佐ヶ谷の金弥氏の家に行くところなのだが，余りひどい姿なので，横浜から丁度途中の私の家に寄ったのだ，ということであった。結局いくらデッチあげようにも全く事実がないのだから当局もあきらめて出したらしい，とにかく顔をそりたい，というので洗面所につれて行くと，カミソリでガリガリひげをそるものだから，そったあとに血が出て再び凄い顔になったことが今でも妙に鮮やかに思い出される。しばらくして私の二重まわしに身を包んで暗い夜道を帰っていった。

数日後，阿佐ヶ谷の金弥さんの家に川田君を知る旧友が数名集まった。燈火管制の暗い部屋の中で，われわれは日本の運命ともいうべきものについて語りあった。夜更けて空襲警報が発令され，遠くに火の手があがって空を赤く染めた。川崎方面がやられているとわかると，集まった１人に森五郎君がおり，かれは当時富士電機の労務担当であったが，「これは大変だ，どうしても行かなくてはならぬ」という。僕と川田君は，「かけつけても同じだよ，今晩は約束通りここに泊ってゆかないか」と止めるのもきかずにアタフタと出ていってしまった。川田君と僕は若い森五郎君が出たあと夜中まで語りあった。その後５月下旬には三田の義塾も焼け，１日おいて北千束の私の家も焼け，そして敗戦となったのである。暗い時代の思い出である。

（経済学部教授）

生活構造論おぼえがき

中　鉢　正　美

1. ２つの生活構造論
2. ２元論における媒介項
3. 生活構造論の歴史性

「職場からの人間疎外，よく『職場砂漠』などという言葉が使われますように，事務からも，作業現場からも，人間労働そのものがシャットアウトされてしまう。こういう情況の下で『労働の人間的構造』というものを今の時点でどういうふうにとらえるべきか，これは藤林さんが今日ご健在であったなら，さらに深くこの問題に取り組まれただろうかと思うのですが，大変残念なことです。」

（大河内一男「藤林敬三博士の人と学問」三田評論，第707号，昭和46年８月，43頁より）

1

「生活構造」ということばが，広い意味での経済学，具体的には労働問題や社会政策の経済学的分析に関連して用いられるようになったのは，昭和恐慌から第２次大戦中にいたる間の，いわゆる国民生活研究の展開過程においてであったということができる。管理通貨制度と物価・賃金の統制を背景に，経済成長を犠牲として強行された軍需産業を中心とする重化学工業化は，国民諸階層の生活に極度の圧迫を加えることなしには，その産業構造変化に対応する労働力配置の再構成を達成しえなかった。この，総体としての労働力配置に現われてくる圧迫の諸側面を，ただ単に統計的諸事実の併列に終らせることなく，その総体を構成している個々の労働者生活について，統一的かつ典型的に画き出すとともに，その圧迫に対抗する組織的手段をすべて剝奪されながらも，なおいわゆる庶民の叡智によってこれに耐えている姿をあきらかにしようとしたところに，当時の生活構造論の発端における志を読みとることができよう。(注1)

戦後は昭和20年代の前半における最低賃金論争，その後半における賃労働の封建性論争等に関連

注（1）　永野順造「国民生活の分析」昭和13年。